ひろえのキャズ便り１０月１４日号より

十河ひろえ

照明を落とした展示空間。ほのかな明かりに導かれ、ぼんやりと照らし出されたベビーベッドを覗き込むと、そこには「FUKUSHIMA　1971.3－2011.3.11」の文字……そんな序章のあと、おもむろに、どこかの（福島の？）田園風景が、大きく壁いっぱいに映し出されます。あぜ道が見えなくなるあたりをときおり通る車のほかには人影もなく、どんより曇った空模様が低気圧の到来を感じさせ、なにが起こっているでもないのに、風に波うつ稲穂がなんとはなしに気持ちをざわつかせる、そんな映像です。「オホーツク海沿岸、北緯○度、東経○度、○○ヘクトパスカル」と、映像とともにせわしなく聞こえてくる気象通報の、なんの感情もともなわない淡々とした調子が、逆に不安をあおっているのだろうか？　そんなもやもやした感覚で全身が満たされたころ、それまで暗闇のなかでなりをひそめていた２台のスライド映写機が、サイレンを思わせるほどの大きな音をともなって、突然、右へ、左へと回転しながら連写をはじめました。四方八方にばらまかれ、ぐるぐるまわりながら映写されるスライド写真。その勢いとスピードに圧倒されていると、気象通報の音声がだんだん小さくなり、ヘクトパスカルは町名や番地とともに流れるマイクロシーベルトに変わっていって……そうこうしてるうちに、なんだかわけのわからない心のなかのもやもやが、わからないなりに輪郭を持ちはじめていることに気づきます。そう、壁にたたきつけられるように連写されている風景は、街中の放射線量が、気圧や気温と同じように日々監視すべき対象となってしまった、“FUKUSHIMA”の「いま」の姿なのです。駅前や住宅街を行き交う人びとも、公園や商店の店先も、どこにでもありそうな街中の風景に見えるこれらの写真は、つい最近、KOSUGI＋ANDOのお二人が、福島市内で撮影してこられたもの。それにしても、あまりに普通すぎやしないだろうか？と思ってしまいますが、実際、そこには、カメラがとらえた通りの日常があったといいます。そして、最後に登場するスライドには、最初に映し出された田園風景とともに、その風景そのものを記録したカメラ自体が映り込んでいました。どのように世界を切り取ろうとも、それは人間の眼がとらえた風景でしかないことを暗示するかのように。

今回、キャズで発表されているKOSUGI＋ANDOによる作品のタイトル、「遷移状態（transition　state）」は、化学反応をはじめた物質が、別の構造を持つ物質として安定するまでに現れる、非常にエネルギーの高い状態をさす用語なのだといいます。高エネルギー状態でありながら直接観測することはできないそれは、鑑賞者が振り返らざるをえない自らをとりまく日常にも含まれるなにかであり、平穏を取り戻していることが逆に奇妙なものとして迫ってくる福島の姿であり、もっといえば、「冷温停止」ということばがあたえる幻想（欺瞞？）でもある……そして、作品によって気持ちをかき立てられる者のなかに起こるなにか、はためにはそれと見ることはできない精神的活動もしかり。そんなこんなで、「なにもしないときこそ最も活動的であり」と、ハンナ・アーレントが人間の思考活動について語りながら『人間の条件』で引用した、カトーの謎めいたことばを思い出しました。そして、このことばには、「ひとりでいるときこそ最もひとりでない」と続くことも……声高に叫ぶのではない仕方で共同体の未来に警告を発する、静とも動とも名づけがたい知性の営みが、確かな手ごたえでもって感じられる、そんなKOSUGI＋ANDO展「遷移状態」なのです。

2011/10/14